鳴沢湧作品集『山のふところ』発刊を寿ぐ

この物語の著者・鳴沢湧さんの出身地は長野県北部の山深き地方である。その故郷の風景に相応しい、穏やかで優しいひびきのある題名だと思われるかもしれない。しかし一読してみると、ことはそう単純ではないことに気付かされる。

個々の作品は短編ではあるが、この全作品を一つに貫くテーマは「祈り」だと言えるだろう。ただし、それを前面に押し出すのではなく、底辺をささえる強固な基素材として、目立ちにくいところで作品全体を構築している。

深い縁あって七十代を過ぎてから、ご夫妻でクリスチャンの道を歩まれた鳴沢さんは、それ以降、己の選択した道が果たして間違いではなかったのかと、真摯に追及することを自らに課した。その揺れ動く思いが「小説」という形で物語化して深化していくことへと導いていったのではないだろうか。

「信仰と人間」という大きなテーマに真正面から取り組んでいるにも拘らず、そうとはあからさまに見せていないところに、鳴沢さん自身の深い「経験知」が感じられる。今回の作品集をまとめられるに当たって、今までバラバラに読ませてもらっていた私は、改めて全編を通して拝読する機会に恵まれた。そのことによって、かつて一読したときには気付かなかったり、理解不足だったりしていたところにやっと思い至る事が出来た。

鳴沢さんが物語の中で主人公にした少年たち―「南野旭」や「一志証太」は、この作品の中で確実に成長している。これでもかという程の「試練」や「受難」に遭いながら、彼らは彼らなりの知恵と賢さ、持ち前の正義感とで自身や地域社会に降りかかる過酷な問題を解決しようと必死になる。その姿が清々しい。

今回の小説集だけでなく、自分史やエッセイなども通して鳴沢さんの作品に触れる機会も多くあったが、やはり小説だけが持つ「フィクション」の中でこそ自由に自分自身を開放できたのではないかと感じられてならない。商業ベースに乗るようないわゆる出版本とは別の価値観で読んでもらえることを強く願うものである。

私にとっては、「人生の大大先輩」に当たる鳴沢さんが、長い歳月を懸けてご自身のテーマと真摯に向き合い続けて、自ら一冊にまとめ上げられたことは、本当に本当に嬉しく尊敬とお手本に値すべきことだと深く感じている。ここに、心より賛辞を奉げたい。そして益々のご健筆を祈るばかりである。

２０２０年３月吉日

創作講座講師　水樹涼子